



軟部肉腫

(なんぶにくしゅ)



※内容を簡素に記載しております。詳しくはHPをご覧ください。

軟部肉腫について

軟部肉腫は軟部組織（筋肉、脂肪、神経など）と言われるところから発生する悪性腫瘍です。全身のあらゆる部位に発生し、約60%は四肢（うち2/3が大腿部などの下肢）に発生すると言われています。頻度として脂肪肉腫が最多で、悪性線維性組織球腫（未分化多形肉腫など）、粘液線維肉腫、平滑筋肉腫の順に多いという状況です。腫瘍の種類によって、発生部位や好発する年齢に特徴がみられます。脂肪肉腫や粘液線維肉腫は大腿部に、類上皮肉腫は前腕から手の浅層に多く発生します。横紋筋肉腫、軟部発生ユーイング肉腫や滑膜肉腫は10歳代から20歳代の若年者に、その他の軟部肉腫は中年以降に好発する傾向があります。腫瘍の種類や悪性度により、治療方針や予後が異なります。進行すると血行性に遠隔転移を生じることがあり、特に肺への転移が多いとされています。

症状について

軟部肉腫の主な症状は腫瘤（しこり）や腫れであり、痛みは伴わないことが多いです。深部に発生した場合、かなり大きくなってからはじめて気が付くこともまれではありません。神経の近くに発生したものや神経そのものに発生したもの（悪性末梢神経鞘腫瘍など）は、しびれや麻痺などの神経症状を伴うことがあります。

診断について

軟部肉腫の診断は主に画像検査と病理組織検査で行われます。軟部肉腫においては、腫瘍マーカーがないことから、血液検査は有用ではないことが通常です。画像検査としては、目的に応じて単純レントゲンやCT、MRI、PET-CTなどが行われます。確定診断を得るためには、腫瘍の一部を採取して病理組織診断を行う必要があります（生検）。不適切な生検が行われた場合には、腫瘍によって周囲の健全な組織が汚染されて切除の際により大きな手術が必要になることがあります。生検を行う際も、後の切除計画も念頭において生検ルートを決定する必要があります、専門施設で行うことが望ましいです。

治療について

治療は、若年者に好発する横紋筋肉腫や軟部発生ユーイング肉腫などの円形細胞肉腫とそれ以外の中年から高齢者に発生する非円形細胞肉腫で大きく異なります。円形細胞肉腫は抗がん剤（化学療法）の効果が期待できるため、化学療法と手術を組み合わせた集学的治療を行います。非円形細胞肉腫の治療は手術が基本です。

治療終了後に腫瘍の再発・転移を生じることが少なくないため、治療後も定期的に通院し、検査を行うことが必要です。

